

# モンゴル遊牧民に学ぶ環境教育の可能性

—人間と多様な自然の相互関係を基軸に—

飯塚 宜子

## あらまし

「地球環境問題の根源は、人間の文化の問題である」という考え方がある。社会、経済、精神、歴史等、多くの側面を持つ「人間の生き方」が、環境問題の根底にあるという考え方である。今日、それぞれの土地の風土に調和しない画一的な現代文明が世界に広がり、文化や生物の多様性が失われている。そのような人工的な都市空間に住む子どもたちが、それぞれの土地の自然に根ざした文化多様性に学ぶことには、さまざまな可能性がある。それは「多様性の喪失が環境問題の根本原因である可能性」<sup>2</sup>に触れる学びであり、また例えば、現代文明社会の中にあっても守るべき、伝承されるべき、ものの見かたや価値への理解を育む契機にもなるだろう。

本稿では、1つの具体的試みとして、文化が自然から乖離しない暮らしを維持するモンゴル遊牧民をとりあげ、日本の親子が、彼らの生業や暮らしの様子を知る場をワークショップの実践を通して創出する。そして、日本の親子は彼らの生き方から何を学べるかを明らかにし、モンゴル遊牧民という異文化理解による環境教育の可能性を検証する。本事例における、参加者の学びを整理すると、概ね以下のものであった。第1に、自分が生きる世界だけが世界ではないという「多様性」の受容、第2に、無意識に保持していた当たり前の感覚を客観的に見つめる「価値の相対化」、第3に、「いのちは自然界のつながりに根ざしていること」への気づき、第4に、生きていることや身近な人とのつながり

などの実感、第5に、目に見えないものの価値、動物や自然との関係などを考える「もう1つの視点」である。

異文化理解による環境教育は、これまで必ずしも広く実施されてこなかった。今後、本稿で述べたような実践研究を継続し、枠組みづくりや理論化もすすめていきたいと考えている。今後の課題として、多様な自然生態に根ざした異なる社会経済環境下にある文化多様性に学ぶべき内容、手法や有効性をさらに詳細に検討することが挙げられる。生態環境と伝統的知識の継承、グローバル化する世界におけるコミュニティのありかたや自然観などを当面のテーマとし、実践者と子どもたちとのコミュニケーションの中から再発見される文化多様性への気づきを基軸とした実践研究をすすめていきたい。

## 1. はじめに

これまでの教育では、偏差値競争の中で有利に働くような、我がことに集中する合理性が追求されてきた。その結果、他者に起きていること、海外や自然界などで起きていることを自分ごととして捉えづらい思考や態度を、懸命に育てていたのではないだろうか。筆者だけではなく、周りの母親たちや、教育産業界に関わる人々に共有のものと思われる、そのような合理的な価値観を再生産し続けることが、持続可能な社会に結びついていくだろうか。人間の生き方として豊かだといえるだろうか。これからは、も

<sup>1</sup> 総合地球環境学研究所ウェブサイト「設立の趣旨と目的」<http://www.chikyuu.ac.jp/rihn/annai/mokuteki.html> (2013年4月9日確認)

<sup>2</sup> 湯本貴和「生物文化多様性の未来可能性」『地球環境学事典』総合地球環境学研究所編 弘文堂 2010年 193ページを要約。

う1つのものの見方や価値観を育む環境教育が必要なのではないかと考えたことが、本研究の背景にある。

「もう1つの視点」を育む方法として注目したのが、少数民族、遊牧民、先住民など、自然に根ざす生き方を維持する異文化である。それらは、グローバル化する世界下でなお、根強く維持されようとする生物文化多様性である。「文化が依拠していた自然から乖離したことが環境問題の根源である」<sup>3</sup>という考え方がある。近代文明は、人間が自然から切り離されても暮らしていけるしくみをつくりあげてきた。自然と文化が結びついた暮らしが忘れ去られ、画一的で均質な現代文明に基づいた共通の文化が、世界に広まったのである。近代的合理性は、そのような均質な現代文明の象徴といえるだろう。近代化が壊してきた自然と文化の関係性を見直すこと、すなわち、現代なお維持される自然と結びついた異文化を理解することには、さまざまな学びの可能性がある。それは合わせ鏡のように、現代文明社会の中にあっても、伝承されるべき、ものの見かたや価値への学びを育むだろう。また、自然と文化の乖離による、生物文化多様性の喪失の理解や、その喪失が環境問題の根本原因である可能性に触れる環境教育にもなり得るはずである。

本稿では、文化が自然から乖離していない人間集団として、モンゴル遊牧民をとりあげ、多くの主体と協働しながら、2011年10月に実施したワークショップの様子を紹介する。遊牧民の生き方を受容し、語り合う中で、現代の日本の親子が彼らから何を学ぶことができたかを明らかにし、この環境教育手法の可能性を検証してみることとする。

## 2. モンゴル草原でのフィールドワーク

日本の子どもたちとの学びの場を創出するために、モンゴル草原でのフィールドワークを実施した。本稿の一連の実践の発端は、2011年4月、愛知県立大学多文化共生研究所長の稲村哲也<sup>4</sup>から、「生物文化多様性に関わる国際交流」をテーマとするイベント<sup>5</sup>への協力を依頼されたことにある。筆者はこのイベントの中で、自然に根ざす民族に学ぶワークショップの開発と実施を提案したのである。9月8日から13日にかけてモンゴルへ渡航し、稲村の紹介によるスヘー・バートルガ<sup>6</sup>と共に、ウランバートルの北約100kmのウルジンドゥラム(Urujinduram)にある遊牧民の夏の宿営地を訪ねた<sup>7</sup>。そこで6家族、子ども11名と親3名にインタビューをし、暮らしの様子を撮影、また子どもたちにカメラを手渡し自分の大切なものの撮影<sup>8</sup>を依頼した。

子どもたちに撮影を依頼した理由は、彼らの世界観の一端を可視化したいと考えたからである。日本の子どもたちと、遊牧民の子どもの世界観、自然観は、きっと異なるものだろう。世界観は、その人間にとって意味があるものによって構築されるならば、大切なものを撮影してもらおうことで、彼らの世界観の一端を知ることが出来ると考えたのである。

旅の最後に訪問した一家は家族8名と親戚2名、合計10名がホトでそろって過ごしていた。父のツェテンダウ(44才)は、近代化への変化を認めながらもモンゴルの遊牧生活を強く誇りとし、伝統を大切に生活している様子だった。本稿のワークショップではこの一家4人兄弟の3番目の女の子であるオユンティユ<sup>9</sup>(12才)を主人公

<sup>3</sup> 阿部健一「環境問題と文化」『地球環境学事典』前掲書 190ページ。

<sup>4</sup> 愛知県立大学多文化共生研究所長、文化人類学者。

<sup>5</sup> 愛・地球博の理念を継承し「生物と文化の多様性」『環境と文化』の共有にとって、世代間の継承が重要という認識のもと、文化の多角的な表象としての音楽、舞踊、儀礼、芸術・工芸などを通じ、児童、若者、一般市民が交流することを目的とし2011年10月29・30日に実施された。

<sup>6</sup> モンゴル国立大学国際言語文化学部教授・副学部長。

<sup>7</sup> この地区の遊牧民の子どもたちは、月曜から金曜は学校の寄宿舎にすることが多いため、土日に宿営地を訪ねようというバートルガの提案に従った。

<sup>8</sup> 大切なものの写真をフォトランゲージとして活用する手法は、開発教育協会がプログラムに学んだ。「実践事例17 絵や写真を通してつながるカンボジアと日本の子どもたち 大切なものは何ですか?」開発教育協会『市民学習実践ハンドブック30』市民学習実践ハンドブック編集委員会編 特定非営利活動法人開発教育協会 2009年48-49ページ。

<sup>9</sup> 日本語での発音と表記はオユンティヤ(Oyuntuya、Оюунтуя)に近い。実践で使ったオユンティユという発音が親しみやすく、以降その発音と表記を使っている。



写真1 ゲルの中のオウンティユちゃん

写真2 羊の屠殺<sup>10</sup> (写真家 三井昌志撮影)

写真3 人間と馬の関係



写真4 伝統的遊牧の道具

とし、彼女の目から見た日常生活と、彼女が撮影した「大切なものの写真」を見ていくこととした。

### 3. 学びの場のツール

ワークショップの実施にあたっては、日本の親子がモンゴル遊牧民の暮らしを、知識として「知る」だけでなく、受容できるよう、さまざまなツールで場を構成した。

- ① 一人の女の子に焦点をあてた暮らしの写真  
 前述した12才のオウンティユちゃん（写真1）の家族、家族が暮らす移動式のゲル、ゲルの周りに広がる草原、家畜のいる風景、家族による家畜の屠殺（写真2）、搾乳、料理、食事、料理の燃料、住まい、おやつや乗馬など、日常の暮らしの写真を見る中で、「なぜ一年の間に



写真5 人間と自然の境界

何回も移動するのだろうか」「なぜ母馬の搾乳に仔馬が必要なのだろうか」などを考えていった。

- ② オウンティユちゃんの大切なもの  
 前述したように、モンゴルでは遊牧民の子ど

<sup>10</sup> 屠殺は重要な場面である。プロ写真家三井昌志に連絡をとり、屠殺の写真2枚について、教育目的のワークショップでの使用と論文掲載の許可を得た。

もたちに、彼らの大切なものの写真を撮影してもらった。日本でのワークショップでは、オウンティユちゃんが撮った4枚の写真のうち3枚を紹介した。1枚目は、馬の絵が祀られる祭壇と、先祖や家族がナーダムで獲得したメダルの写真である(写真3)。オウンティユちゃんの一家は代々馬の調教をする家であり、この写真には馬と人間の強い結びつき、また先祖や家族、生業への誇りが写しだされている。2枚目は、馬頭琴やハダックや馬具など伝統の道具の写真である(写真4)。1枚目と異なり、モンゴル遊牧民のゲルには必ず見られる道具であり、伝統的な遊牧への敬愛の思いが見て取れる。3枚目は一見「草原」に見えるが、オウンティユちゃんが写したのはただの草原ではない。ゲルが撤去された跡が大地に丸く残っている(写真5)。一年後、遊牧の移動を経てこの地に戻る時、このゲル跡は跡形もなく草原に還っているだろう。これは、自分たちが荒らした大地を元の自然に還している写真なのである<sup>11</sup>。

### ③ 動画

オウンティユちゃんの大切なものが、なぜ大切なのかを理解する補助ツールとして、ナーダムの動画<sup>12</sup>と、馬頭琴の音色や遊牧の暮らしを紹介する動画<sup>13</sup>を活用した。



写真6 羊毛に触れる子どもたち

### ④ モノ

触れ、匂いをかぎ、味わうなど、五感により遊牧生活を知覚できるツールを用意した。

- ・スーテーツァイ(塩入りミルクティー)の試飲  
遊牧民は白い食べ物(乳製品)と赤い食べ物(肉)を食する。中でもスーテーツァイは、朝から夜寝るまで、主食のように食される<sup>14</sup>。
- ・シャガイ(羊の踝の骨)  
赤い食べ物である羊一頭、遊牧民は皮も血も肉<sup>15</sup>も内臓も無駄にしない。羊の踝の骨は、子どもたちのおもちゃとなる。
- ・羊毛、フェルト、スピンドル  
羊毛をフェルトにしてゲルを覆うことで、モンゴル遊牧民は氷点下の冬を越す。彼らが紡ぐのはラクダの毛であるが、ワークショップではスピンドルで羊毛を紡いでみた。植物や動物など自然に由来するものから、人間の衣がつくられてきたことを体感するためである。

これらのツールを活用し、ワークショップ形式の学びの場を、親子を対象として創出した。ワークショップとは、知識伝授ではなく、参加者主体の体験型・学び合いの場である。特にグループワークは、「一人が勝てば誰かが負ける、とか、他者の不幸を前提に自分の幸せが成り立つ、というような、WIN/LOSEの「相克性」の罠に陥るのではなく、お互いの存在や関わりが



写真7 ベアワークで聞き取りあう親子

<sup>11</sup> 本稿のワークショップは、国立民族学博物館教授、牧畜文化論・モンゴル研究を専門とする小長谷有紀にシナリオの詳細や写真の解釈を相談し、多くの指摘を得た。プログラムの趣旨を理解した適切なアドバイス、知見の教示は文献では得られない大変貴重なものであった。

<sup>12</sup> ナーダムに関する報道をyoutubeから探した。http://www.youtube.com/watch?v=aB4kafBcfM&feature=related(2013年4月9日確認)

<sup>13</sup> UNESCOによる無形文化遺産The Traditional Music of the Morin Khuurのウェブサイトから閲覧できる。http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&RL=00068(2013年4月9日確認)

<sup>14</sup> 石井智美、小長谷有紀「小さな巨人「微生物」がささえる草原の食卓」『季刊民族学85号』72-78ページによる。

<sup>15</sup> 「胆嚢以外のすべてを完璧に食として利用しつくす」(石井智美、小長谷有紀前掲書)

全体を豊かにし、WIN/WIN の関係を可能にする「相乗性」への試み<sup>16</sup>なのである。本稿のワークショップでは、遊牧民の女の子と日本の子どもたちが、「相乗性」の試みをなすことを目指した。

#### 4. 小学生とのワークショップの様子

愛知県立大学多文化共生研究所主催イベント『森と草原の地球教室』体験プログラムは2011年10月29日・30日に一般募集の親子を対象に、モリコロパークにて実施された。本稿の実践は、まずこれに先立つ10月23日に愛知県立大学多文化交流ホールにて、プレワークショップとして実施した<sup>17</sup>。参加者はスクリーンに写される写真や動画を見て、遊牧にまつわるモノに触れながら（写真6）、グループワークやペアワーク（写真7）により気づきを深め、語りあった<sup>18</sup>。また、10月29日・30日実施の『森と草原の地球教室』においても、他のプログラムと並行しながら、本編のワークショップを親子や大学生9名を対象に実施した。

#### 5. 参加者による学び

##### 5.1 「多様性」の受容

モンゴル遊牧民は、現代文明と根底から異なる文化を持つ。数時間のワークショップでは、奥深い文化の一部しか体験することはできないが、参加者は自分とかけ離れた文化の担い手を、共感をもって受容した。自分の世界だけが世界ではない、という多様性を認めたといえる。以下のような感想<sup>19</sup>がみられた。

- ・モンゴルのことをもっと知りたいです（小3）
- ・モンゴルの生活以外にも知りたいです（小3）
- ・日本ではほとんど加工されたあとのものを食べている（小5）

- ・世界にはいろいろな人がいることがわかった（小5）
- ・オユニチュちゃんのような暮らしをやってみたい（小6）
- ・モンゴルって異世界。自分の世界が小さく思えた（大学生）
- ・自分の食べるものをすべて自分たちの力でくりだしている（大人）
- ・動物を苦しめずに殺す方法を知っている / お乳のとり方など知恵がある（大人）

また、ワークショップ1週間後のインタビューでは「ワークショップで、その人の気持ちになる、よりその人のことを知りたいと思う、という気持ちは何より大事なんだな、と思い、それを生かしたいと思った。自分と違うことを排除することはよくあるのだが、違うなら違うで、排除するのではなく、それがどう違うかということを知りたいと思う気持ちは何より大切だと思った<sup>20</sup>」という発言が聞かれた。私たちは異質な他者を排除したり、自分とは無関係と考えたり、好奇心のみでとらえたりしがちであるが、彼らはなぜそのような行動をとるのか、彼らが大切と思うものがなぜ大切なのか、一歩踏み込んで理解することにより、共に生きる人々として受容し、尊重する態度を持つことができる。その経験は「成功体験」となり、「共生」への手ごたえのある学びになり得ると考えられる。

##### 5.2 価値の相対化

ワークショップ1週間後のインタビューでは「モンゴルの遊牧民は、私たちより主体的に生きている気がした。それは、自分が食べるモノを、責任をもってつくって食べることをしていないという違いがあるのではないかと思った<sup>21</sup>」という発言が聞かれた。都市生活者は、大地に根ざして生きる技術や知恵を手放しているが、異文化を知ることにより、その失われたものを認

<sup>16</sup> 中野民夫 『ワークショップー新しい学びと創造の場』岩波新書 2001年154ページ。

<sup>17</sup> 実践にあたっては、地域で自然学校を主宰する宮崎喜一と絵画造形教室を主宰する名川敬子に相談を重ねた。名川の呼びかけにより、日進おやこ劇場長久手ブロック（現・長久手おやこ劇場）の親子23名が参加者として集まった。『森と草原の地球教室』を主催する愛知県立大学や総合地球環境学研究所の協力も得た。

<sup>18</sup> ワークシートデザインは菊地薫（総合地球環境学研究所）による

<sup>19</sup> 参加者の感想は読みやすさのため、趣旨を損なわないよう修文し掲載する。

<sup>20</sup> 2011年10月29日Sさん モリコロパーク地球市民交流センターでのインタビュー。

<sup>21</sup> 2011年10月29日Sさん モリコロパーク地球市民交流センターでのインタビュー。

識し得たといえる。またその後のワークショップ実践においても、大学生や母親たちには「もしかしたら日本の大学生より満足しているのではないか」<sup>22</sup>、また「オウンティユちゃんたちは〈変わらない〉ことを選んでいるかもしれない」<sup>23</sup>等、価値を相対化する発言が見られた。

### 5.3 いのちは自然界のつながりに根ざしていること

人間が食べるものは、いのちであることへの気づきがあった。「子どもたちは生きるために殺し、大切に食べることを通して、命の大切さを感じていると思う。けど私たちだって殺すシーンは見てないだけで、肉は食べてるんだよね。命を感じずに食べてるから残しちゃうたりするのかな」(大人)などに見られるものである。また、自然界のいのちあるものとのつながりの中で、自分が生きていることへの気づきも見られた。

- ・地球に生きているものがないと、生きられないから大切 (小5)
- ・他の動物がないとぼくたちも生きていけない (小4)
- ・(自然は) 生きているものすべての命のみなもだから。(大人)

広く指摘されているように、現代文明社会は、生産者と消費者、生産地と消費地が分断された社会である。草原で共に生きる羊一頭のいのちを、まるごと食する文化を知ることが、大地、水、大気、植物、動物など、自然界と自分のいのちは分かち難く結びついていることの理解を促したと思われる。

### 5.4 生きていることや身近な人とのつながりの実感

低学年児童には、「生きていること、存在すること」を幸福とする表現が少なからず見られ、大人にもそれらを再確認する様子が見られた。

- ・生きていること (小1・小2・小3)
- ・自分があること (小3)

- ・生きられることは大切なこと。ぼくはぼくだからいいんだ (小3)
- ・平和でくらせる (小3)
- ・生きていくことのすばらしさを感じました (大人)
- ・食べて眠れる (大学生)

遊牧民は遊牧民らしく、自分は自分らしく生きることが幸福であるとする表現も見られた。

- ・オウンティユちゃんの幸福は草原を見ること、自分の幸福は海を見ること (小5)
- ・オウンティユちゃんの幸福はモンゴルの遊牧民であること、自分の幸福は日本人であること (中1)
- ・私の周りの人(私も含む)がみんなその人らしく過ごせること (大人)

また、ほぼすべての小学生児童が、身近な人とのつながりの大切さを表現した。

- ・(自分の幸福は) 家族といること、家族がいること (小学生参加者ほぼ全員)
- ・友達といること、友達がいること (多数の小学生)

現代の子どもたちは、being (存在すること)ではなく doing (行為すること)で評価されることに慣れている。しかし、ここでは「存在すること」への肯定感に軸足が置かれている。自然に根ざした生き方に触れる場が、自己肯定感や根源的な喜びを意識化する契機となった可能性が考えられる。

### 5.5 もう1つの視点

物質ではないものの価値や、自然や動物との関係など、新たな視点が見いだされた。

物質的でないものの価値

- ・(大切なものは) 思い出、いのち (小4)
- ・(大切なものは) 地球に生きてるもの(小5)
- ・自分の幸せを考えたとき、意外に物質的なものは重要度が低い(大学生)
- ・伝統をどう守っていくのか、その中でどこを変えてどこを変えてはいけないのか(大)

<sup>22</sup> 2012年7月9日 同志社大学1回生対象、同様のワークショップでの回答。

<sup>23</sup> 2012年8月11日 京都の親子対象のワークショップでの大人の回答。

大学院生<sup>24)</sup>

- ・(オウンティユちゃんの笑顔の理由は) アイデンティティ、民族としての誇り(大学院生)
- ・すごく違うのは、土地を所有する感覚がないところ(大学院生)

自然や動物との関係

- ・自分たちの生活は人間中心の生活だけど、モンゴルは自然や動物のことも自分(人間)のこのように大切に生きているところが全くちがう。(大人)
- ・私たちの生活の中でも生き物に生かされているということをもう一度考え直して、いろいろな物を大切につかったり、いろいろな使い直してみたりしたい。(大人)
- ・子どもの自然・動物に対する感覚が知りたい(大学院生)
- ・自然にはかなわないから、みんなで協力しながらこの地球を大切にしていきたい。必要なものを必要な分だけ。自分達だけでなく、ずーっと後のみんなの為に。(大人)
- ・人の暮らしは自然条件で決まる。生かされている感覚が神に通じる(大学院生)
- ・資源をムダにしない循環型の暮らし(大学院生)

遊牧民の暮らしから見えるものは、現代の資源利用を未来世代の視点から考え直すこと、共有資源としての土地利用、伝統的な生き方と現代文明のバランスのとおり方など、日本の暮らしや社会を考え直す契機にもなり得るものである。また、自分は何者かというアイデンティティ、他の生きもの等とのつながり、そのつながりに生かされている感覚など、日常生活や教育の中では意識化されにくい感性が、呼びさまされる機会になったと考えられる。

## 6. おわりに

ある母親は「(子どもたちが)自分が知らない国の子もたちの生活を見て、想像すること

によって、自分のことが見つめられたことがとても良かったです」とワークショップをふりかえった。異文化理解による環境教育は、これまで必ずしも広く実施されてこなかった。本稿で述べた一例における、上述のような学びや理解は、文化多様性に学ぶ環境教育の可能性を示唆している。今後も実践研究を継続し、さらに幅広く多様な文化の理解による環境教育の枠組みを発展させ、併せて理論の構築もすすめていきたいと考えている。課題として、多様な自然生態に根ざした異なる社会経済環境下の、文化多様性に学ぶべき内容、手法や有効性をさらに詳細に検討することが挙げられる。学習プログラムを開発していくならば、テーマやツールとして、社会科学の側面からは、生態環境と伝統的知識の継承、グローバル化する世界におけるコミュニティのありかた、文化と歴史の動態、コモンスの国際比較などが有効ではないかと思われる。人文科学的側面からは、人間のアイデンティティ、場の力、先住民らの自然観などがテーマとして考えられるだろう。異なる文化を理解し受容する子どもたちの感性を大切にしつつ、実践者と子どもたちとのコミュニケーションの中から再発見される文化多様性への気づきを基軸とし、新たな環境教育のあり方を考えながら、今後の実践研究をすすめていきたい。

## 参考文献

- 阿部健一「環境問題と文化」(総合地球環境学研究所編『地球環境学事典』弘文堂、2010年)、190-191 ページ。
- 飯田夏代(監修/枝廣淳子)「環境教育の視座—自然と人間の関係性を問う」(五島敦子/関口知子編著『未来をつくる教育ESD—持続可能な多文化社会をめざして』明石書店、2010年)、137 ページ。
- 石井智美、小長谷有紀「小さな巨人「微生物」がささえる草原の食卓」『季刊民族学』(国立民族学博物館監修、千里文化財団) 第85号、1998年、72-78 ページ。
- 開発教育協会「実践事例17 絵や写真を通してつながるカンボジアと日本の子どもたち 大切なものは何ですか?」(市民学習実践ハンドブック編集委員会編、『市民学習実践ハンドブック30』2009年)、48-49 ページ。
- 中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場』岩波新書、2001年、154 ページ。

<sup>24)</sup> 本節の大学院生の回答は、2012年5月25日、同志社大学で実施した同様のワークショップ時のものである。

湯本貴和「生物文化多様性の未来可能性」(総合地球環境学研究所編『地球環境学事典』弘文堂, 2010年), 192-193 ページ。

## 参考ウェブサイト

総合地球環境学研究所「設立の趣旨と目的」

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn/annai/mokuteki.html>

ナーダムに関する報道 <http://www.youtube.com/watch?v=aB4kafBcfdM&feature=related>

UNESCO The Traditional Music of the Morin Khuur

<http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&RL=00068>